

第4節 まとめ

本遺跡の特色は、低湿地遺跡であり特殊泥炭層（腐植土）の上に構成されていることがある。この特殊泥炭層の性質上漆器・櫂・石斧柄・木鉢などの木製品が出土し、極めて重要視される。

本遺跡は、出土遺物からみてその始源を船元式に併行する縄文時代中期前半にまで遡ることができ、後期初頭の中津式に併行するものの出土をみると量的には極めて乏しい。出土量と層位から判断して、本遺跡の主体をなすのは福田K II式に併行した土器群で後期中葉に比定される。

今回の調査で確認された遺跡の範囲は、野球場西側の丘陵先端の山際から、山裾を南下し野球場南側の丘陵先端付近に囲まれた谷合に存在する。野球場西側の丘陵の東裾に設定したグリッドでは、3 A S E IIIにおいて京都府桑洞下遺跡で報告されたB類に属する炉跡が検出された。5 A S E Iでは頗る量の縄文土器が出土しており、明確な遺構は検出されなかったものの生活に密着した痕跡を想起させる。9 A' N W Iでは、砂層面で溝状遺構を検出したが、性格は判然としない。この砂層面で船元式土器を出土しており、本遺跡では最も古い時期のものである。11 B' N E IIIでは、泥炭層の上層で元住吉山II式と思われる台付無頬壺の出土をみると、遺構は伴わない。

野球場南側の谷央部に設定したグリッドからは、遺物の出土はみられたが遺構を検出するまでには致っていない。これは、当時においても湖沼化していたためと思われるが、13 A N E IVの砂層では遺物を包含しており、泥炭層が形成される以前には一時的な文化層があった可能性が考えられる。

野球場南側の丘陵の山際に設定した13 B N E IVは、遺構は確認されていないが縄文土器、石鍤等が出土し、旧地形が南北方向に低くなるのが確認された。12 C N W I・IIIにおいては、福田K II式に併行する宍形の甕と共に、頗る量の木製品が検出された。木製品の中でも朱漆を塗った鉢形木器や漆塗腕輪状木器等は、5 A S E Iで出土した耳杓・垂飾・朱漆塗笄状特殊製品等とともに装飾性豊かな遺物である。また、ヒノキの織維で編まれた籠や杓子・木鉢・石斧柄・櫂等が出土したこととは、縄文時代の経済基盤である植物採取・狩獵・漁業に付随するもので、当時の生活に密着した道具が確認されたといえる。

12 C N W で出土した櫂は8本を数えるが、この内2本は、櫂本来の使用目的を失って水路に伴う杭として転用されている。この水路跡は、交互に打込まれた杭に板が絡まり相対した位置に杭2本と、転用された櫂2本が打込まれており水路と判断した。水路の軸は、旧地形の傾斜線に平行に構築され北西に向って低くなる。他の木製品、流木等のほとんどは水路に平行して検出された。

12 C N W では北西方向に傾斜しているのが確認されたが、13 B N E IVにおいては南北方向に傾斜しており、両グリッドの中間地点が谷央部に張り出している可能性が考えら

れる。このことは、張り出し部分に水路以外の生活に関連した遺構の存在を想起させる。

さて、本遺跡の特性として低地性の遺跡であることが掲げられる。低地の縄文遺跡の立地は、自然堤防、扇状原、氾濫原上の微高地、砂丘等が代表的であり、鳥取県東部に分布する縄文遺跡もみなこのタイプに属している。従来ともすれば、狩猟・採集経済であった縄文遺跡は高いところに立地するという考え方が支配的であり、いわゆる『上流からの流れ込み』として軽視される傾向のある縄文時代の低地性遺跡の重要性は、既に指摘の通りである。^{注1}

本遺跡は、西隣りの桂見遺跡等とともに鳥取県ひいては全国的にみても、縄文文化を解明していく上で重要な遺跡であることは明らかである。本遺跡では、桂見遺跡で提示された低地性遺跡のもつ重要性が、発掘当初あまり認識されなかった。このため、調査に対する取り組み方が必ずしも十分でなかったが、調査期間を通じて多くの教訓を学び得た。今後の研究に大いに生かせるよう努力してゆきたい。（中野）

注1 渡辺誠「桂見遺跡をめぐる諸問題点」『桂見遺跡発掘調査報告書』鳥取市教育委員会 1978

第3章 布勢グランド古墳群

第1節 概 要

調査前に鳥取県教育委員会と当財団により古墳の確認調査の結果、陸上競技場の東側丘陵部を中心に16基の古墳が所在することが確認されました。そのうちの安全性を考えて、1・10・13・14・15号墳の調査を行いました。しかしながら、調査の結果、墳丘と思われていたものはすべて自然地形であることが判明しました。未調査の2～6、8・9・11・12号墳のうち、2号墳も自然地形と思われます。4・5号墳は、共有し合う周濠が確認されています。他の古墳については不明です。（中村）

(1) 1号墳（挿図39、図版21）

布勢グランド1号墳は、鳥取県遺跡地図のNo78—里仁12号墳（円墳直径8m高さ12m）と記載されているものです。この「古墳」の西側には里仁第2横穴群が、南側には、横穴式石室をもつ里仁13・14号墳があったのですが、横穴群が陸上競技場建設の際に、里仁13・14号墳は土砂採取のために未調査のままにこの世から姿を消してしまいました。布勢グランド1号墳もその時に西側の1/3を土砂採取のために破壊されたものでした。

1号墳は南から北へのびる尾根の先端に位置しています。この山は、もろい花崗岩で形成されているのですが、ちょうど1号墳の位置するあたりから土の堆積がみられ、また、北側において段をなす所がみされることから、盛土をなし、段でもって周溝とする古墳であると思われました。

表土を20cmほど掘りさげたとき、赤灰褐色の帯が赤褐色の地に、尾根に直交するように見えます。周溝と仮定しているあたりも若干ではありますが落ち込んでいるようです。埋葬施設と思われる赤灰褐色は、長軸1.8m、短軸0.4mの方形をしています。又、この「埋葬施設」の南西にも長軸1.3m、短軸0.4mの赤灰褐色の落ち込みが見られ、1号墳は、複数の埋葬施設をもつ古墳時代後期のものと考えていました。

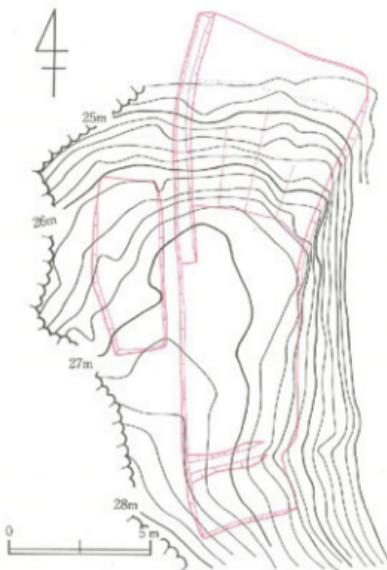
しかしながら調査の結果、赤褐色土と赤褐色土の間隔として赤灰褐色土が堆積していることが判明し、赤灰褐色土の落ち込みと思われたものは、埋葬施設ではありませんでした。

その後の調査でも埋葬施設および遺物は検出されず、結局1号墳は古墳ではないという判断に達しました。（中村）

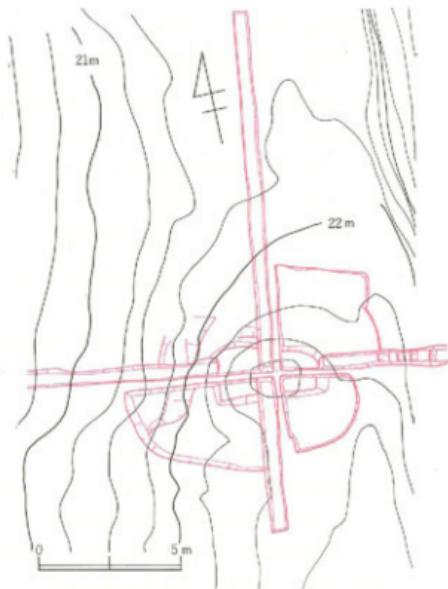
(2) 10号墳（挿図41、図版21）

表土を取り去った段階で堅くしまった層が見られ、盛り土ではないかと考えられたため、全体を広く掘り下げていったのだが周溝らしきものも検出されず、また埋葬施設が検出されないまま地山と考えられる層に達したため、結局古墳ではないという判断に達している。

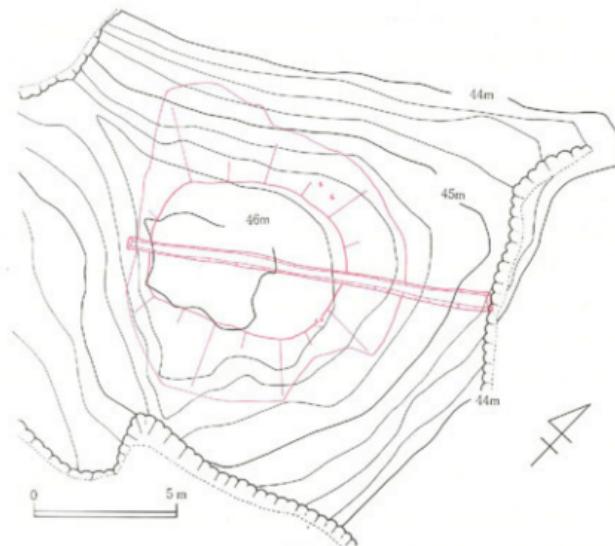
ここからは土鍤が6個出土しているが、それが何を意味するかは、残念ながら不明である。（長岡）



挿図39 1号填平面実測図



挿図40 13号填平面実測図



挿図41 10号填平面実測図

(3) 13号墳（挿図40、図版21）

県教委の遺跡分布地図にある里仁31号墳（布勢13号墳）は、径5m、高さ0.5mの円墳であると考えられていた。11月26日調査第1回目、表土をはいだ段階で、墳丘中央部に明黄褐色の「真砂」のかたい土がほぼ長方形の形をして検出された。尾根沿いに南北トレンチを入れたが周溝らしい落ちこみは確認されなかった。しかも墳丘の長方形に見えた部分は落ちこみではなく、逆にまわりが落ちており、中央がもりあがっていることがわかった。つまり13号墳の盛りあがりは、昔土地の境界であって、両側を桃畠にするために境界線を残して両側から削ったものらしい。その後、長方形の真砂土を残して掘り下げたが、遺物はついに一つもなく、全体がまさの層までたどりついた。

13号墳は、古墳であったとしても、すでに盛土にあたる部分は吹きとばされたか、人為的に削られたかして、現在では古墳であることを証明することができない。また全く自然の地形とも考えられる。（坂本）

(4) 14号墳（挿図42、図版21）

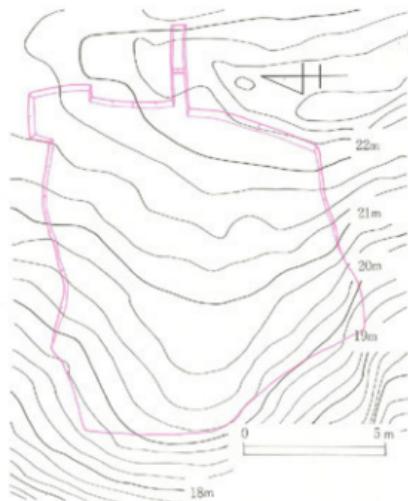
13号墳の北に、尾根からテラス状に平坦面をもつ地形がある。発掘前、我々はそのテラス状の地形を無墳丘墓とでも言うべき墓の可能性があると考えた。古墳時代初期から後期にかけて、山の斜面にできたテラス状の地形に盛土をもたず、溝によって墓域を画し、土括墓、木棺直葬墓を埋設する形式の古墳があるからである。（例えば青谷町大口古墳群－「大口古墳群発掘調査概報」－青谷町教育委員会・1980）

しかし、調査したところ、テラス状の平坦面を20cmほど掘り下げるとき、明黄褐色のかたい層があらわれ、その上は13号墳を掘り下げた時と同じく、地山と考えられるため、それ以上掘り下げなかつた。テラス状の平坦面にも、落ちこみは検出できなかつた。

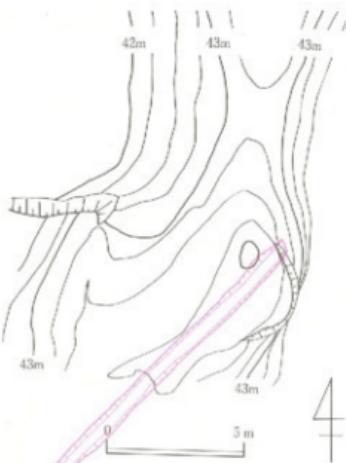
問題点としては、この平坦面が自然にできるものか、それとも人工的に削ったものなのかということがある。東西の急傾斜の斜面には、明茶褐色土が明黄褐色の土にのっかっており、明茶褐色土は、堆積によるものではなく、この地形のできた時からの層であると思われ（土の質が明黄褐色土と非常によく似ている）、その明茶褐色土が平坦面では確認できなかつたことは、自然によるものか、人為的なものかはわからぬけれども、もりあがっていた部分が削られてこのような地形になったと考えられる。北の尾根沿いに、同じようなテラスがいくつかあるが、同様の性格を持つと推定される。（坂本）

(5) 15号墳（挿図43、図版21）

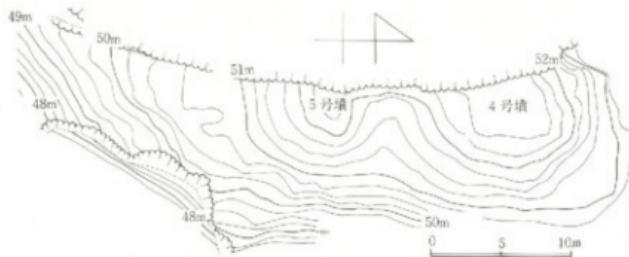
15号墳は、最初からトレンチを入れて調査したのだが、ここでは早くから埋葬施設が確認できたと思っていた所、結局1号墳と同じく自然堆積が埋葬施設のように見えたりすぎないことが判明した。（長岡）



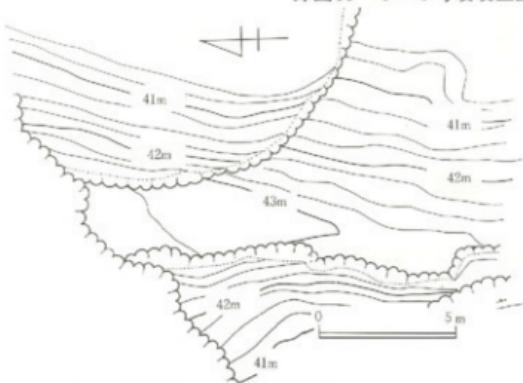
挿図42 14号墳平面実測図



挿図43 15号墳平面実測図



挿図44 4・5号墳墳丘図



挿図45 9号墳墳丘図

第4章 布勢第2遺跡

第1節 概 要

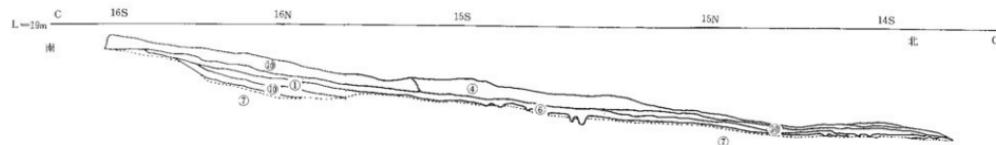
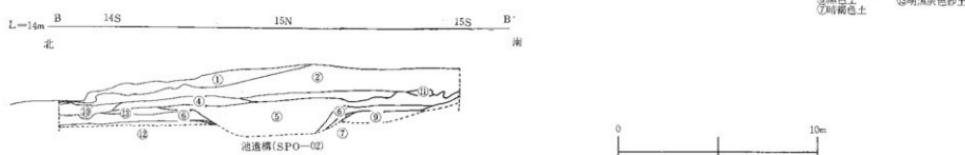
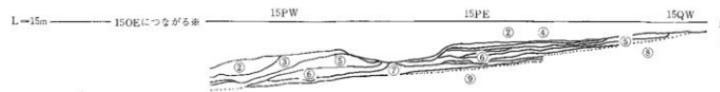
陸上競技場の南側に位置した丘陵部に位置する。陸上競技場および丘陵部の土砂採取により、旧地形のおもかけを残していない。

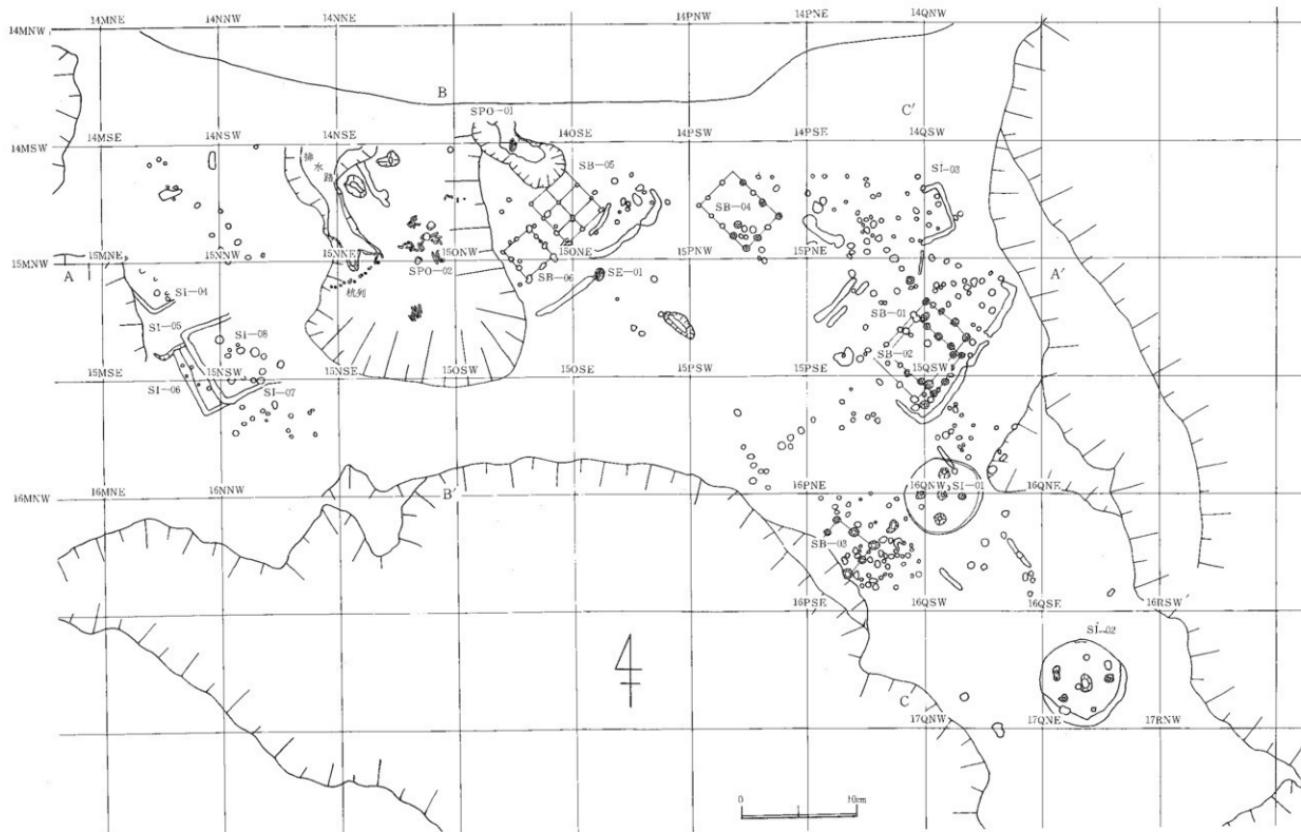
以前は、谷間をはさんだ丘陵部で、畠地として利用されていた。今回の調査で明らかになったものは、堅穴住居跡8棟、掘立柱建物6棟、井戸1基、ため池遺構および排水路2ヶ所である。遺構は標高9～15mの斜面上に検出された。時期的には、弥生時代中期～後期、古墳時代後期、中世と大別できる。当初から四方を削られ、鳥状に残っていたため遺跡の全域をつかめなかった点、かえすがえすも残念であった。（中村）



挿図46 第2遺跡旧地形図

插図47

布勢第2遺跡
土層図



挿図48 布勢第2遺跡全体遺構図

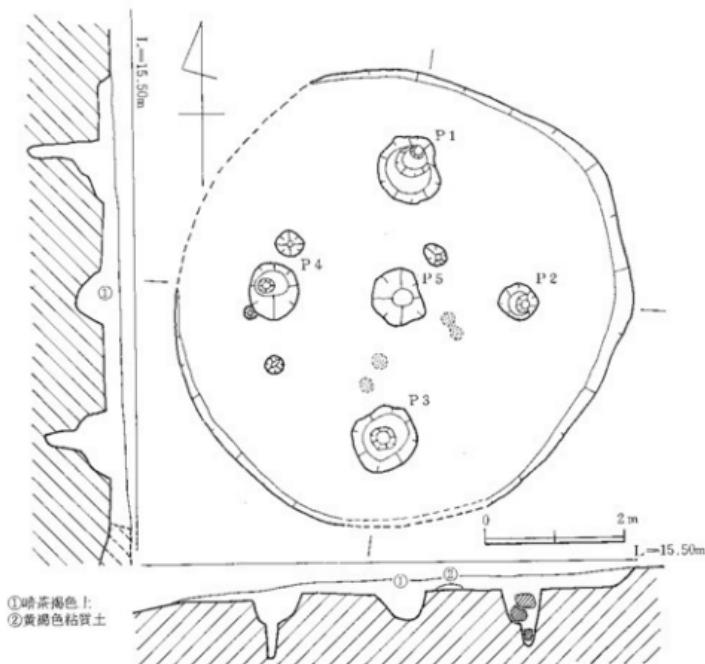
第2節 遺構

(1) 壴穴住居跡 (S I)

a S I 01

第2遺跡の東側のなだらかな斜面に位置し15・16Q、15・16P地区にまたがる。南東には玉作工房であるS I 02があり、南西にはSB03、そして北にはSB01、02がある。平面形は円形であるが、北西部の壁は掘りすぎたため検出されなかった。床面径は約6.30mを測り、面積約31m²である。側溝は認められなかった。壁高は南側で約27cm。住居跡の上層の黒褐色土層より古墳時代後期の土師器片が検出されており、その時代に削平された可能性がある。また住居跡上の海拔15.50m付近には集石がみられ、住居廃棄後なんらかの理由で石を並べるというようなことが存在したかもしれない。

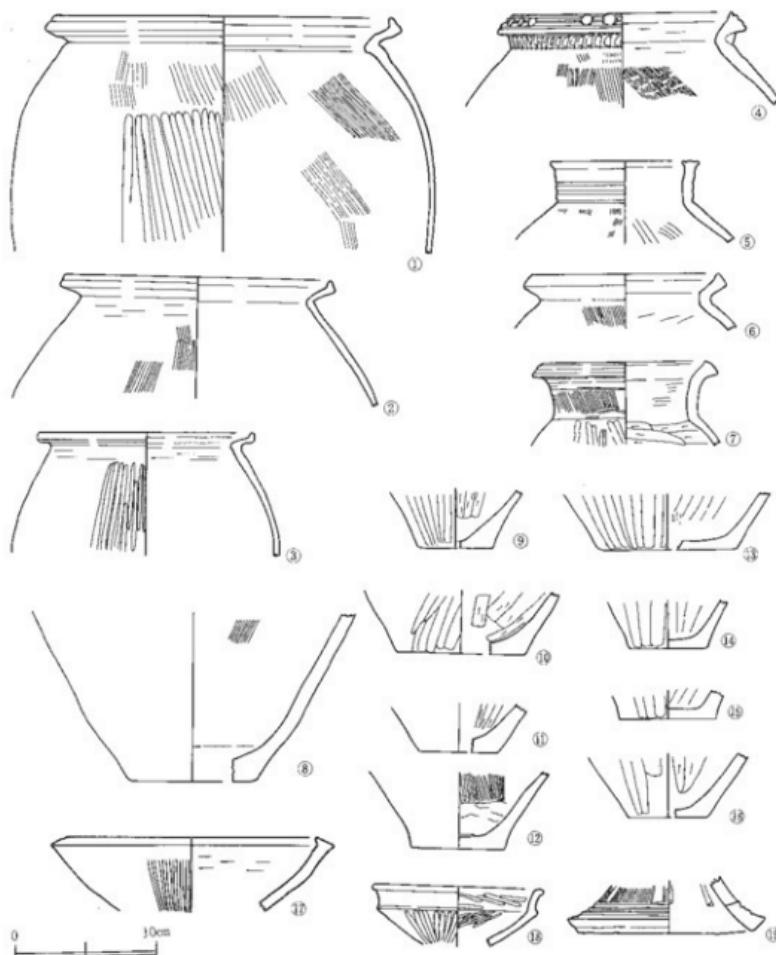
柱穴は4穴であり、大きさはP 1から順に(94×93-101) (57×53-84) (96×93-97) (82×73-91) cmである。P 1は3段に掘られ、他は2段に掘られている。P 2には直径25cm程の石が中に埋められていた。4つの柱穴の並びはやや菱形状にゆがんでおり、狭角が約85°である。柱穴間隔はP 1から順に右廻りで、2.70、2.82、2.74、



插図49 S I 01 遺構図

2.67mを測る。床面中央には(83×72-41)cmの特殊ピットがあり、不整円形を呈す。焼土面は南側と西南西方向に3ヶ所みられた。

遺物は上器のみで、いずれも破片であるが量はかなり多い。弥生時代中期末の土器がほとんどであり、甕、壺、高杯等がある。本住居跡もこの時期のものであると考えられる。(坂本)

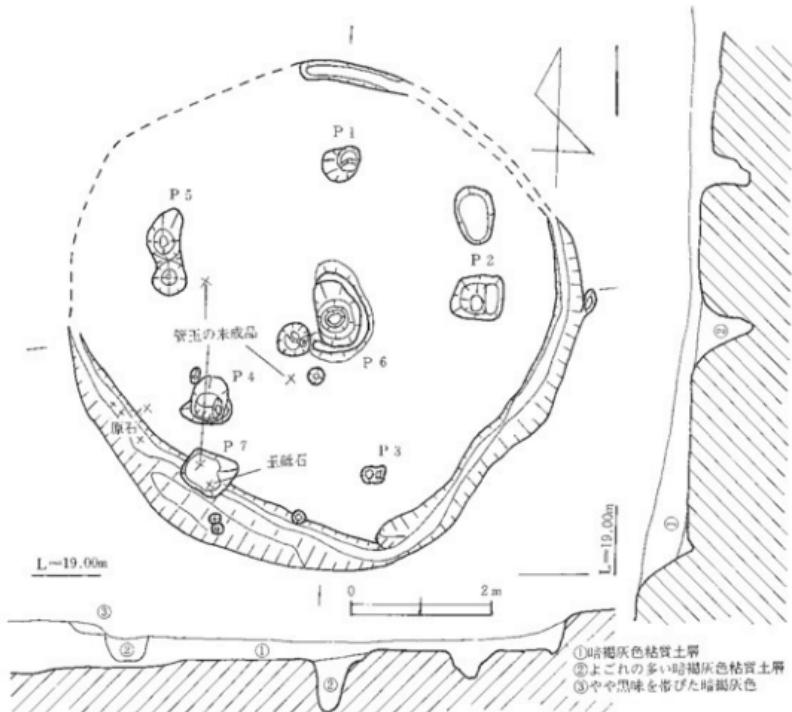


挿図50 S-101 遺物実測図

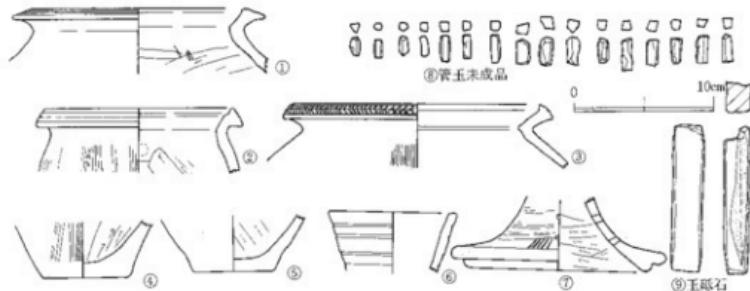
b S I 02 (挿図 51・52、図版 23・29)

16Q 地区の傾斜面に張床をして造られている。平面形は隅丸五角形を呈し、長軸 6.90m 短軸 6.20m を測る。床面積は 32.75m² の規模である。壁高は東壁 53cm、南壁 70cm で、西及び北壁は確認できなかった。側溝は幅 20cm 内外、深さ 10cm 前後の溝が壁下をめぐる。柱穴は 5 穴あり P 1 から順に (60×49-66) (85×60-50) (35×20-52) (75×50-47) (120×35-66) cm の大きさである。柱穴間隔は P 1 から順に右廻りで、2.80、2.90、2.30、2.50、2.80m を測る。床面中央には 140×80-86 cm の特殊ピット P 6 をもち、西側を除いてやや盛り上った縁を有する。焼土面は特殊ピットの南側に 2 ケ所認められた。

遺物は、住居跡内より弥生土器片及び玉剥片が多数出土している。又、P 7 より多数の緑色凝灰岩片、数個の管玉の未製品、同時に玉砥石が検出された。これらの出土品及び平面形等から本住居跡は弥生時代後期の初頭期の玉作工房跡と考えられるよう。(山根)



挿図 51 S I 02 遺構図

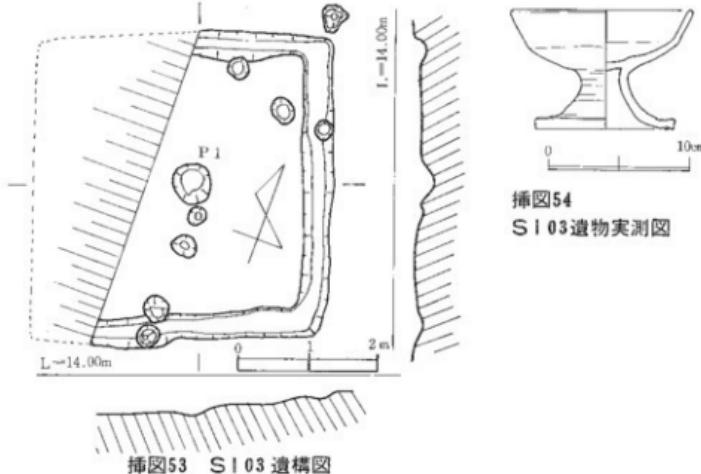


挿図52 S I 02 遺物実測図

c S I 03 (挿図 53・54、図版 24・29)

第2遺跡の東斜面に位置する。平面形は方形で西側を削られているため全容は把握しきれぬが、南北軸 4.15m、東西軸 3.30m 以上であり、床面積も 14m² 以上である。壁面は北側で最大値 8cm を測る。側溝は幅 45cm、深さ 10cm の U 字構が掘られており、四方をめぐったと考えられる。ピットは床面に 6 個あり、中央の P 1 (55×55-17.5 cm) が最大であるが、柱穴と思われるものはない。

遺物は須恵器高杯が 1 個検出された。遺物及び遺構の平面プランからすれば、S I 03 は古墳時代後期（6世紀末頃）と考えられる。（山根）



挿図54
S I 03 遺物実測図

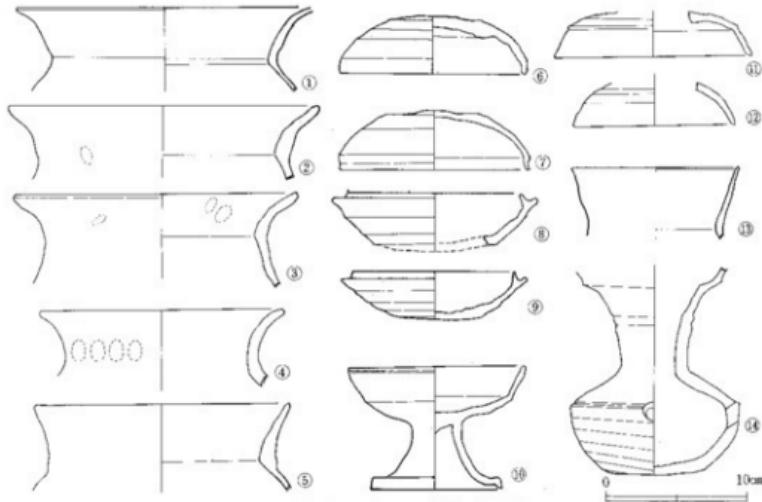
d S I 04 (挿図 55・56、図版 24・30)

第2遺跡の西端に位置し、丘陵部の東斜面にある。南側で S I 05 と重複する。土砂

採取のため、東西とも削られており、わずかに南側と北側のみが検出された。平面形は方形と推測され、床面の大きさは、1辺が5.8mである。壁高は20cmで、壁下に側溝がめぐるものと思われる。側溝は、幅20cm、深さ10cmのU字溝である。床面に6個のピットを検出したが、そのうちのP1(50×40-60)、P2(50×55-20)cmが柱穴と思われ、柱穴間は2.30mを測る。中央部と推定される場所に特殊ピットをもつが、半分がすでに削られている。焼土面は検出されなかった。床面およびP2内より土師器、須恵器が出土した。須恵器は陶邑の編年の中Ⅱ-4期頃にあたるため、この住居跡は、6世紀末葉のものと思われる。（中村）



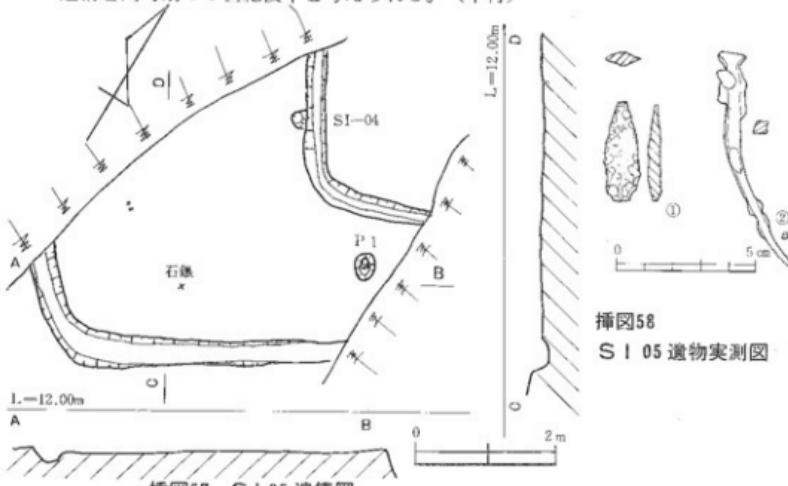
挿図55 S104 遺構図



挿図56 S104 遺物実測図

e S I 05 (挿図 57・58、図版 26・30)

第2遺跡の西端に位置し、丘陵の東斜面にある。北側でS I 04、南側でS I 06と重複する。土砂採集のため、東西とも削られているが、平面は方形をなすものと思われる。壁高は約20cmを測り、壁下に側溝がめぐるものと思われる。側溝は幅20cm、深さ8cmを測る。床面にピットを2個検出したが、P 1が柱穴と思われる。出土遺物は少なく、鉄釘と石鎌1点が出土したのみで、時期は明らかではないが、周りの遺構と同時期の6世紀後半と考えられる。(中村)



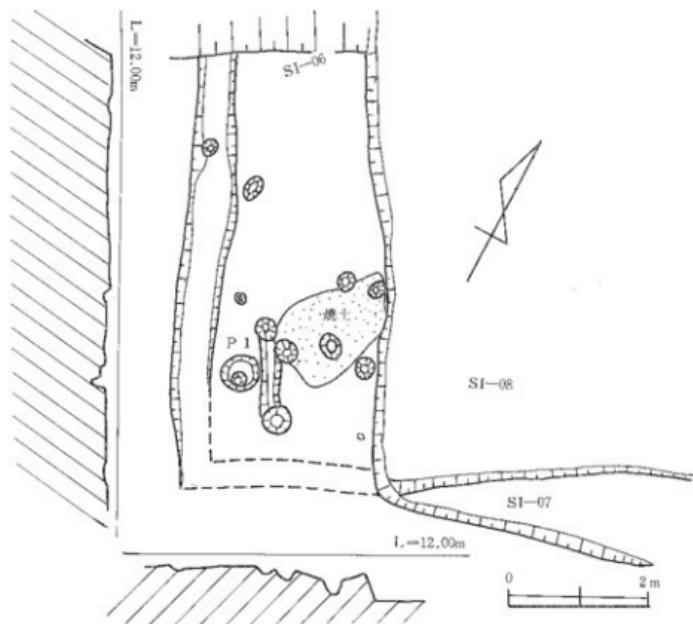
挿図57 S I 05 遺構図

f S I 06 (挿図 59・60、図版 24・30)

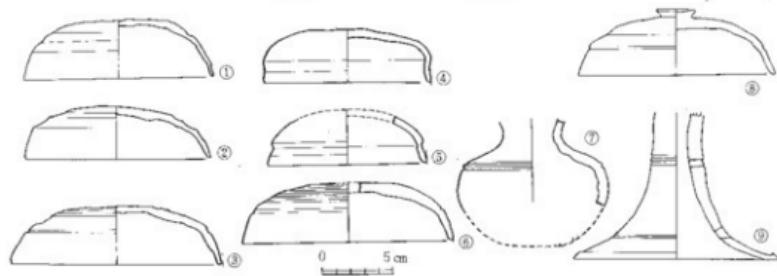
第2遺跡西端に位置し、丘陵の東斜面にある。北でS I 06と重複し、東でS I 07、08と重複する。上面のほとんどがすでに削られており、また、東側は耕作によって削られている。東側は、S I 08を埋めた張り床で造られたと思うが検出されず西側のみが検出できた。平面形は方形と思われる。大きさは不明。周囲に側溝がめぐると思われる。側溝は幅60cm深さ5cmを側溝。床面に11個のピットを検出した。柱穴は、P 1(50×50-20)cmと思われる。P 1の東側に、焼土面が検出された。側溝内より多くの須恵器が出土した。時期は陶邑のII-3~4期にあたり、この住居跡は6世紀後半のものと思われる。(中村)

g S I 07 (挿図 59)

第2遺跡の西端に位置する。S I 06、08と重複し、南側の一部しか検出されなかった。平面形および大きさは不明。時期は周りの遺構と同じ6世紀後半~末と思われる。(中村)



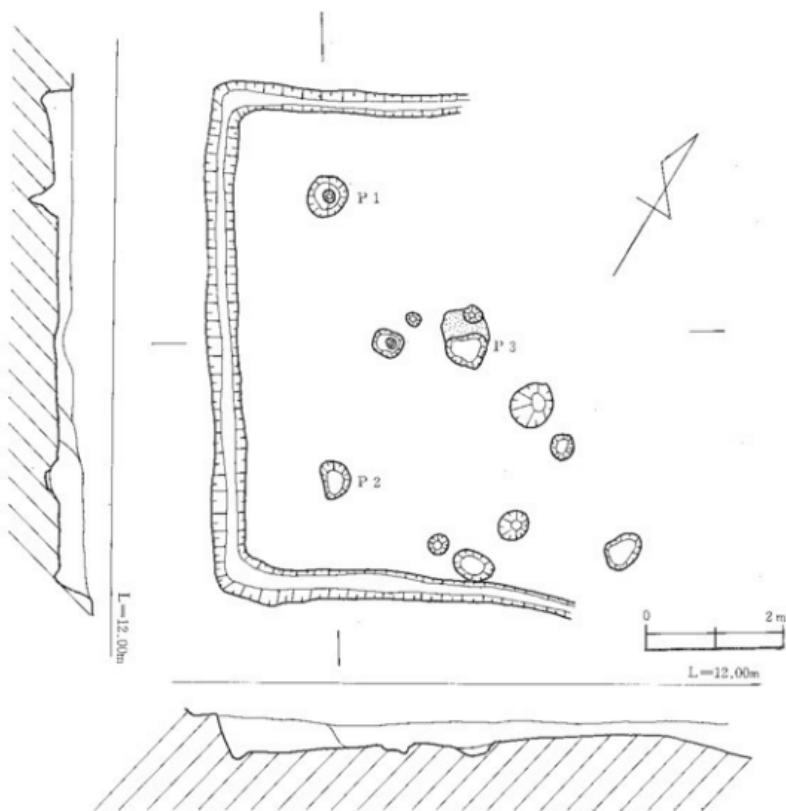
挿図59 SI-06・07 遺構図



挿図60 SI-06 遺物実測図

h SI-08 (挿図61、図版24)

丘陵部の東斜面に位置し、西にSI-06、07、東にSPO-02がある。東側を張り床式にした方形で、1辺が6.5mと思われる。床面に12個のピットを検出した。柱穴はP1 (60×55-40) P2 (50×40-25)で、柱穴間は4mである。中央に円形の特殊ピットP3 (60×80-20)をもつ。特殊ピットの北側に焼土面が広がっている。遺物は出土されなかったが、周りの遺構と同時期と思われ、6世紀後半～末のものと思われる。（中村）



挿図61 SI 08 遺構図

(2) 捜立柱建物跡 (SB)

a SB 01 (挿図 62・63、図版 25・31)

第2遺跡の東側15Q地区に位置し、SI 03の南、SI 01の北である。主軸は北東-南西軸で、梁間3間、桁行4間の建物である。桁行長6.84m、妻通長4.66mで、床面積31.9m²である。建物の東側は斜面を形成しており、建物にそって幅50cm、深さ10cmの溝が「L」形にめぐる。柱穴は隅丸方形に近く13個を数えるが、この内二段の掘り方をもつものが5個を数える。各柱間距離はP1より1.60、1.50、1.61、1.82、1.62、1.72、1.67、1.78、1.70、-、-、1.66、1.76、1.54mである。柱穴底の絶対高もP1より13.51、13.68、13.90、14.55、14.54、14.53、14.04、14.03、14.07、14.02、-、13.56、13.65、13.78mで差は最大値103cmである。各柱穴プランはP1より(50×52-56)(44×61-57)(55×64-46)(55×62×40)(43×55-39)(55×55-43)(64×65-41)(55×55-40)(38×47-24)(45×44-21)-(46×35-23)(40×43-27)(44×46-17)cmである。

各柱穴とも少量の遺物を検出したが図化できるものが少なく、溝から検出したもので考えると弥生時代後期初頭（青木II）に比定できる。（中野）

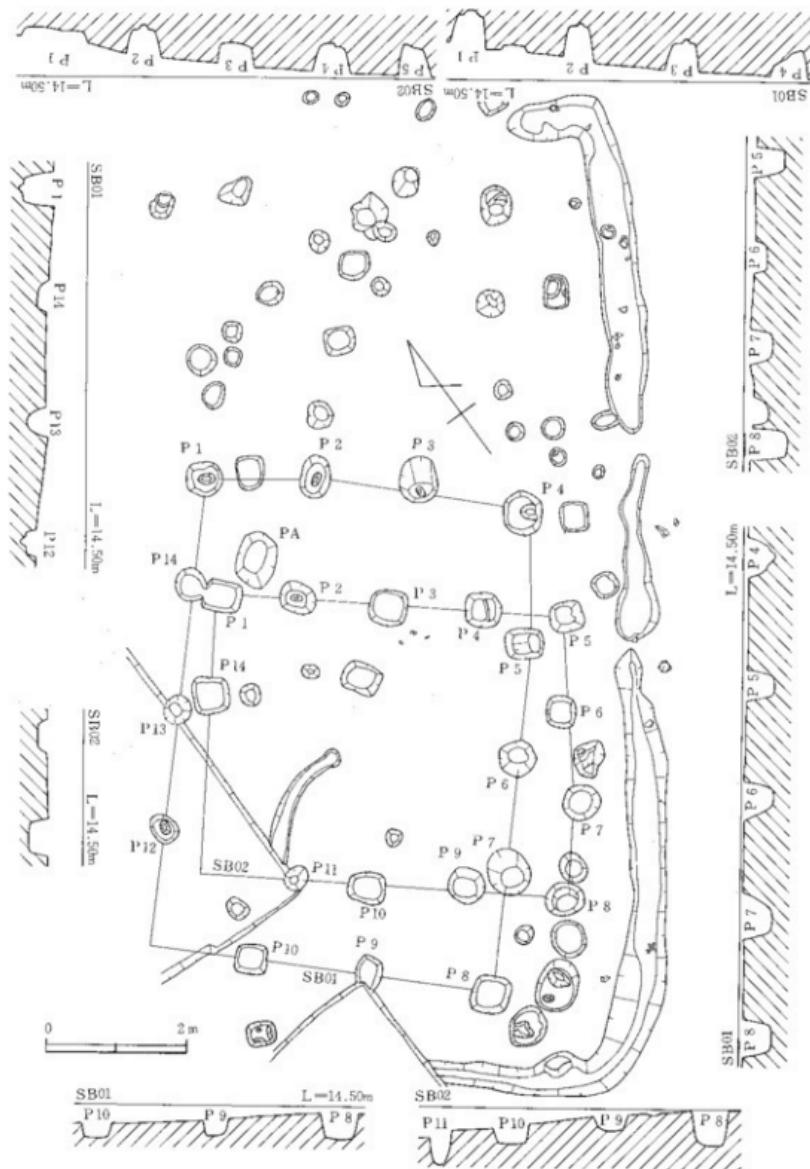
b SB 02 (挿図 62・63、図版 25・31)

第2遺跡の東側15Q地区に位置し、SI 03の南、SI 01の北である。SB 01と主軸を直交して重り合う。主軸は北西-南東軸で、梁間3間、桁行4間の建物である。桁行長4.96m、妻通長4.00mで、床面積19.8m²である。柱穴は12個を数え、北妻通柱列の2個を欠く。P2は二段の掘り方をもつ。柱間距離はP1より1.14、1.30、1.30、1.13、1.37、1.25、1.39、1.47、1.39、1.04、-、-、-、1.46mである。柱穴底の絶対高もP1より13.85、13.75、14.02、14.00、14.01、14.29、14.19、13.97、14.19、13.98、13.68、-、-、13.73mで差は最大値61cmである。各柱穴プランはP1より(52×47-17)(51×45-47)(53×51-33)(53×51-41)(48×44-46)(42×46-16)(54×49-32)(54×46-51)(52×50-23)(53×54-30)(32×35-48)-、-、(52×50-27)cmである。

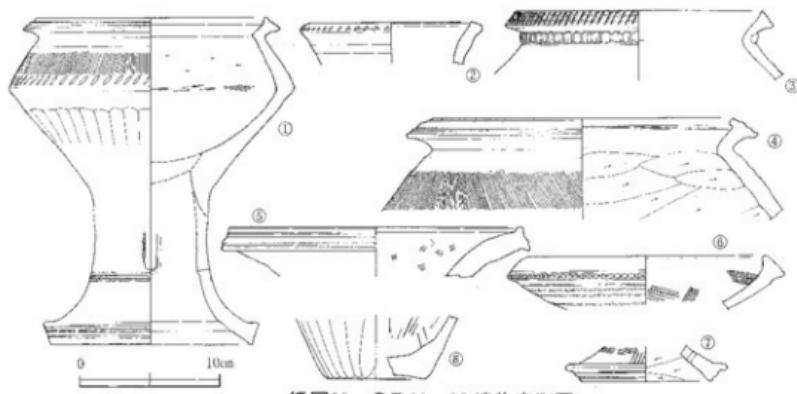
各柱穴から遺物の検出が認められるが図化できるものは少ない。PAより高杯⑥と器台⑤、P3付近の床面から壺②が検出した。重り合いからSB 01より下ると考えられる。（中野）

c SB 03 (挿図 64・65、図版 26・31)

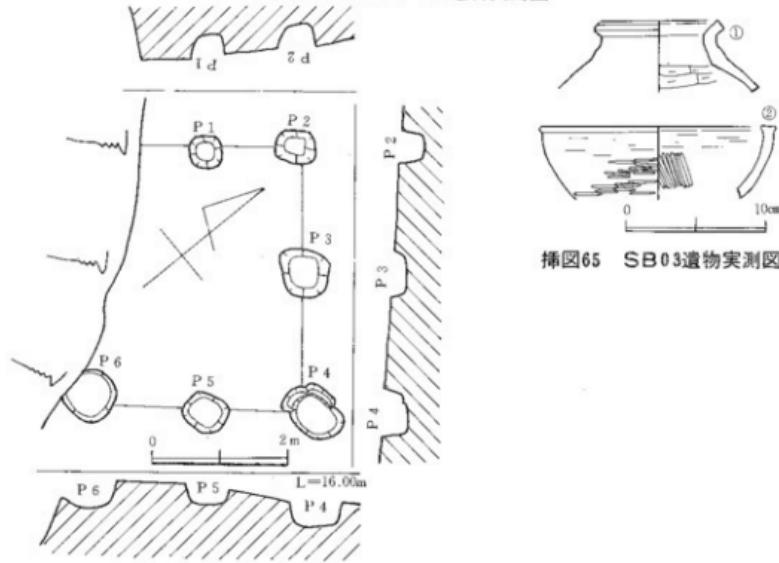
16P地区の北向きに落ちていくなだらかな斜面上に位置し、その東北東方向に2.5m離れてSI 01がある。南西側は土取りにより、すでに崩壊していた。周囲には多くのピットがあり、他にも掘立柱建物跡がある可能性があったが確認できなかった。主軸はほぼ北東-南西方向でN-46°-Eである。規模は梁間2間、桁行2間以上



插図62 SB01・02 遺構図



插図63 SB01・02遺物実測図



插図64 SB03遺構図

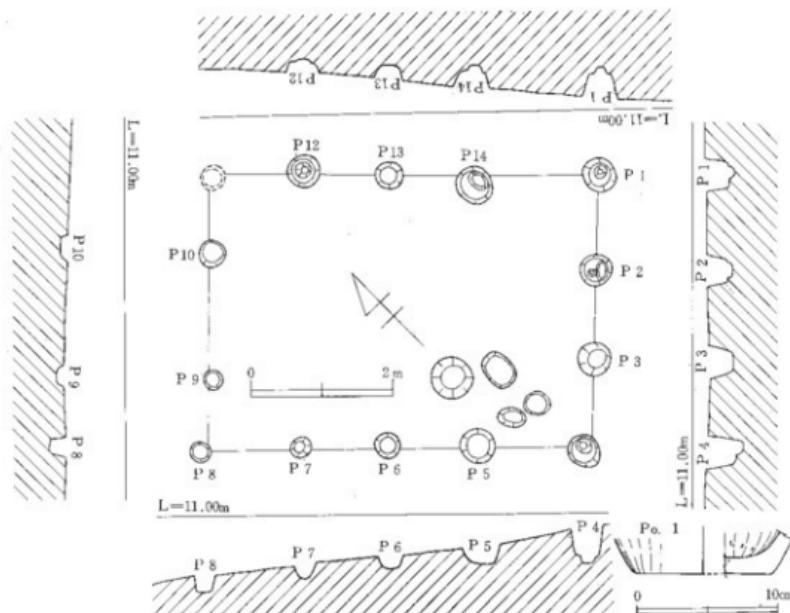
插図65 SB03遺物実測図

4

の建物である。妻通りは 3.90m を測る。桁行 2 間とすれば、桁行長は 3.00m となる。柱穴は P 1 から順に (48×48-33) (60×52-38) (70×57-37) (62×54-38) (75×72-45) cm。P 4 は、2 つのピットを切って掘り込まれている。柱穴間距離は P 1 から、1.35、1.92、2.08、1.35、1.65m である。遺物は P 1 から土器片が数点出土しているが、いずれも弥生土器であった。遺物より弥生時代後期初頭と考えられる。（坂本）

d SB 04 (挿図 66、図版 26)

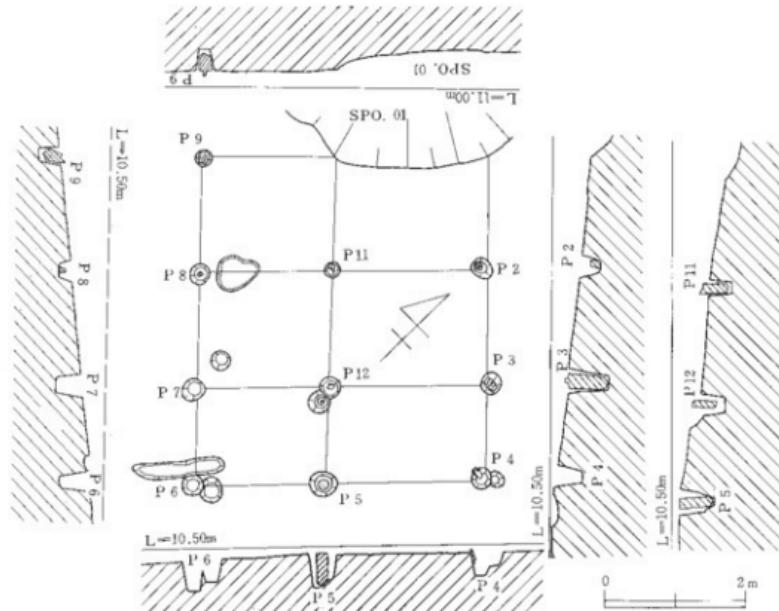
14Pの南西区に位置し、SB 05の東に存在する。主軸を北西-南東にとる梁間3間、桁行4間の建物である。長軸桁行長5.46m、短軸妻通長3.84mを測り、床面積20.9m²である。柱穴は北側を削りすぎたため、13個を検出した。P₁、P₂、P₄、P₁₂、P₁₄は二段底で、他はすべて円形の単孔である。各柱間距離は、P₁から0.88、0.8、0.84、1.02、0.85、0.91、1.12、0.8、1.47、-、-、0.78、0.77、1.32mを測る。各柱穴底の絶対高はP₁より10.42、10.43、10.43、10.27、10.29、10.23、10.10、9.92、10.03、10.10、-、10.22、10.32、10.35mで、その差は最大値51cmである。各柱穴プラン、は、P₁から(48×46-44)(44×40-37)(47×47-36)(46×45×52)(50×50-28)(37×36-20)(30×29-19)(30×30-26)(28×28-10)(38×38-10)(-)(46×46-20)(39×38-22)(54×50-34)cmを測る。遺物は、P₂から弥生底部が1点出土している。弥生時代後期頃と考えられる。(津川)



挿図66 SB 04 造構・遺物実測図

e SB 05 (挿図 67、図版 26)

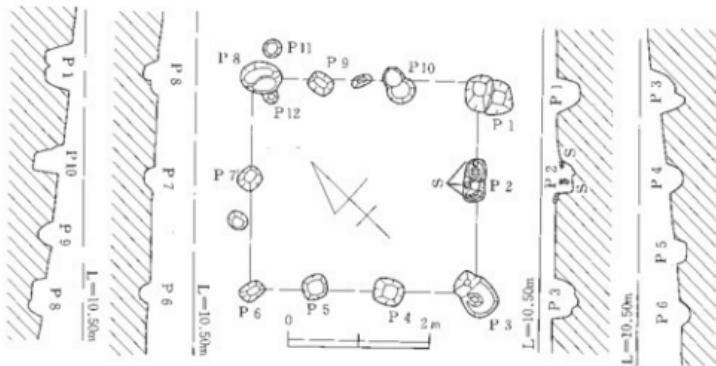
140南西、南東区のほぼ中に位置し、SB 06の北東、SB 04の西、SPO 01の南東に存在する。北東側をSPO 01が削っているため規模はつかめないが、主軸を北西—南東にとる梁間2間、桁行3間の総柱の建物と推定される。主軸はSB 06に平行する。長軸桁行長4.65m、短軸妻通長4.1mを測り床面積約18.8m²である。柱穴は北西側がSPO 01で削られているため、10個を検出した。 P_2 、 P_3 、 P_5 、 P_8 、 P_{10} 、 P_{12} から柱根を検出した。 P_4 、 P_6 、 P_9 は建て変えのためか重複している。又、 P_6 が二段底で、他はすべて円形の単孔である。各柱穴間距離は P_6 より1.34、1.08、1.90、1.24、1.08、1.33、1.37、-、-、1.41、0.89mを測る。各柱穴底の絶対高は P_6 より9.82、9.70、10.05、9.91、9.87、9.77、9.81、9.48、-、9.66、9.76mでその差は最大値57cmである。各柱穴間プランは P_2 より(27×26-29)(32×28-57)(46×29-38)(39×36-49)(55×29-42)(31×31-38)(29×28-19)(24×22-30)(-)(22×21-33)(46×28-41)cmを測る。 P_6 から土師質土器の小片が出土しており、柱根が残る事から、中世の倉庫かと考えられる。(津川)



挿図67 SB 05 遺構図

f SB 06 (挿図 68、図版 26)

14O南西区、15O北西区の中間に位置し、SB 05の南西、SPO 02の東に存在する。主軸を北西-南東にとる梁間2間、桁行3間の建物である。主軸がSB 05と平行する。長軸桁行長3.2m、短軸妻通長2.9mを測り、床面積は9.28m²である。柱穴は10個を検出した。P₈、P₉を除く他の柱穴は隅丸方形に近い。P₁、P₂、P₃、P₆、P₈が建てかえのためか重複している。P₂、P₃、P₆は二段底で、他はすべて単孔である。北側P₈近くの柱穴、P₁₁・P₁₂から柱根を検出している。各柱間距離はP₁より0.68、1.04、0.72、0.7、0.52、1.30、1.05、0.38、0.74、0.78mを測る。各柱穴底の絶対高はP₁より9.93、10.07、9.95、9.89、9.75、9.74、9.73、9.81、9.89、9.78mで、その差は最大値34cmである。各柱穴プランはP₁より(66×50-34)(60×20-24)(58×51-36)(42×38-20)(36×35-14)(35×28-12)(36×33-14)(59×44-20)(36×32-18)(56×29-40)cmを測る。遺物はみつけられなかった。が、柱根が残ったり主軸が同一の点からSB 05と同じ時期の建物と考えられる。(津川)

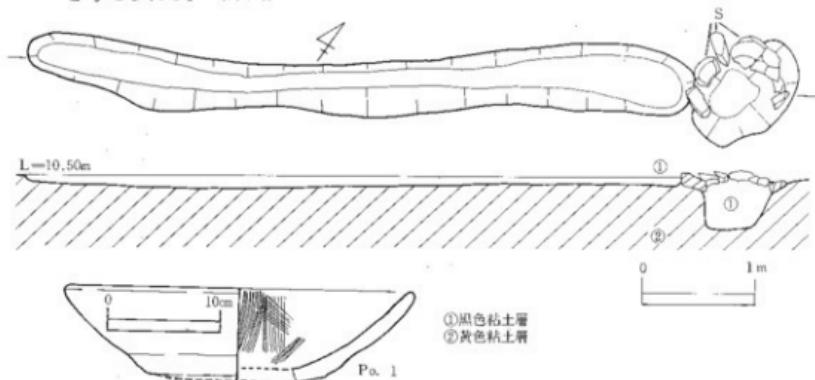


挿図68 SB 06 遺構図

(3) 井 戸 (SE)

a SE 01 とそれに伴う溝状遺構 (挿図 69、図版 27)

15ON E、NW区の中間に位置し、SB 05の南、SB 06の南東、SPO 02の東に存在する。井戸は、楕円形で上縁部半分に石組を伴うものである。溝は細長くSPO 02に流れ込むよう傾斜している。これらの主軸は北東-南西にとる。井戸の上縁部長軸1.06m、短軸0.76m、深さ0.38mで底面は、そら豆形をした楕円形で長軸0.42m、短軸0.32mを測る。底面直上で焼きがわるく、もろい瓦質土器を検出した。溝の長軸5.80m、短軸0.46m、深さ0.06mを測る。遺物は何ら検出されなかった。底面の黄色粘土層から湧水が見られる。調査中に朝くみ上げた水が夕方には一杯になっているのが常であった。時期は、付近にある柱根を持つ建物SB 05・06等と同じ時期のものと考えられる。(津川)



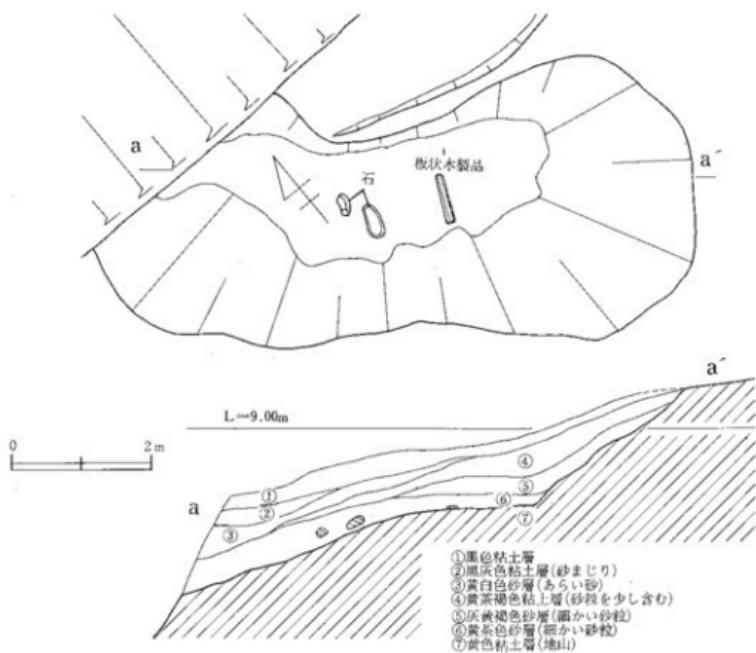
挿図69 SE 01 遺構・遺物実測図

(4) 池 (SPO)

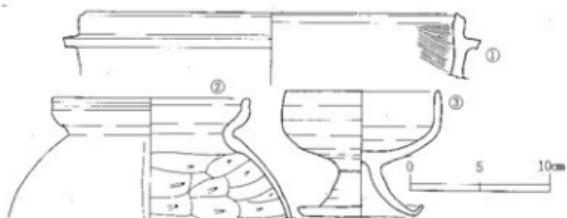
a SPO-01

14OS W、14ON Wに位置し、SB 05の北西に存在する。北側を陸上競技場を造る際削られているため規模はつかめないが、そんなに大きな池とは思われない。主軸は北西-南東に細長い。池の上縁部、長軸(切られている所まで)7.2m、短軸2.9m、深さ1.1mで底面は細長く不整形で、長軸(同)4.9m、短軸1.4mを測る。層は上層から6層を数える。第1層は主に遺物の包含層で、瓦質の土なべ(挿図71・①)、土師器甕(同②)、須恵器の高杯(同③)を検出している。第2・3層は雨水などの流入により中央底に堆積したものと思われる。遺物はなし。第4層は砂粒を少し含む粘土層でこの層からも遺物はなし。第5・6層は水のろ過現象により底面に堆積したものと思われる。遺物は板状木製品が1枚の他、木の根、石等を検出している。地山面第7層より湧水を見る。時期は古墳時代から中世までのもの

を含むため断定できないが、およそその間の長期間にわたって使われた池と思われる。（津川）



挿図70 SPO 01 遺構図



挿図71 SPO 01 遺物実測図

b SPO 02 (挿図 72 ~ 75、図版 27・31)

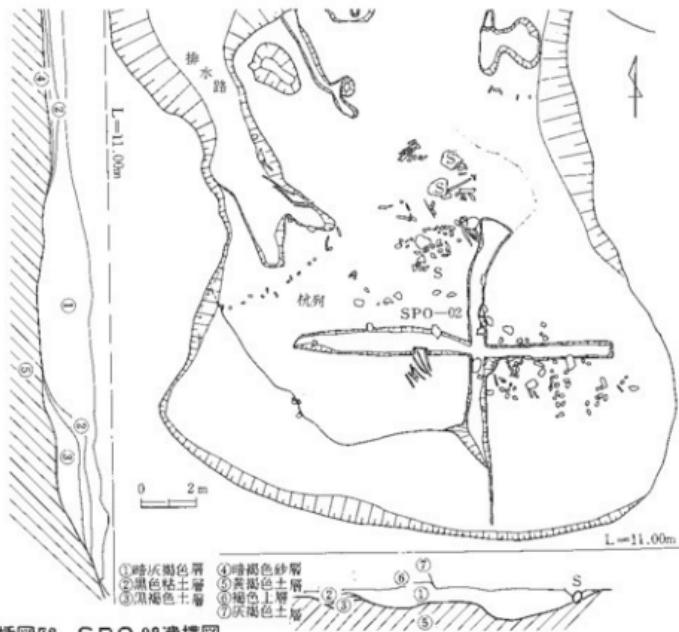
第2遺跡のはば中央部に位置する。陸上競技場建設以前は東西丘陵の谷間にあた

り、畠地として利用されていた。北東にはSPO01、東にSE01があり、北に排水路が流れる。平面形は不整形な方形をなし、長軸 13.75m、短軸 10.5m、深さ 1.7m を測る。杭がN-56.5°-E の角度でもって26本並ぶ。杭間は平均約50cmであるが、中央部において集中している。杭列の南側には、板が積み重ねられている。これらの南側には、20~60cm大の石が杭列にそって検出されており、木組みと石組みで水をせきとめていたと思われる。

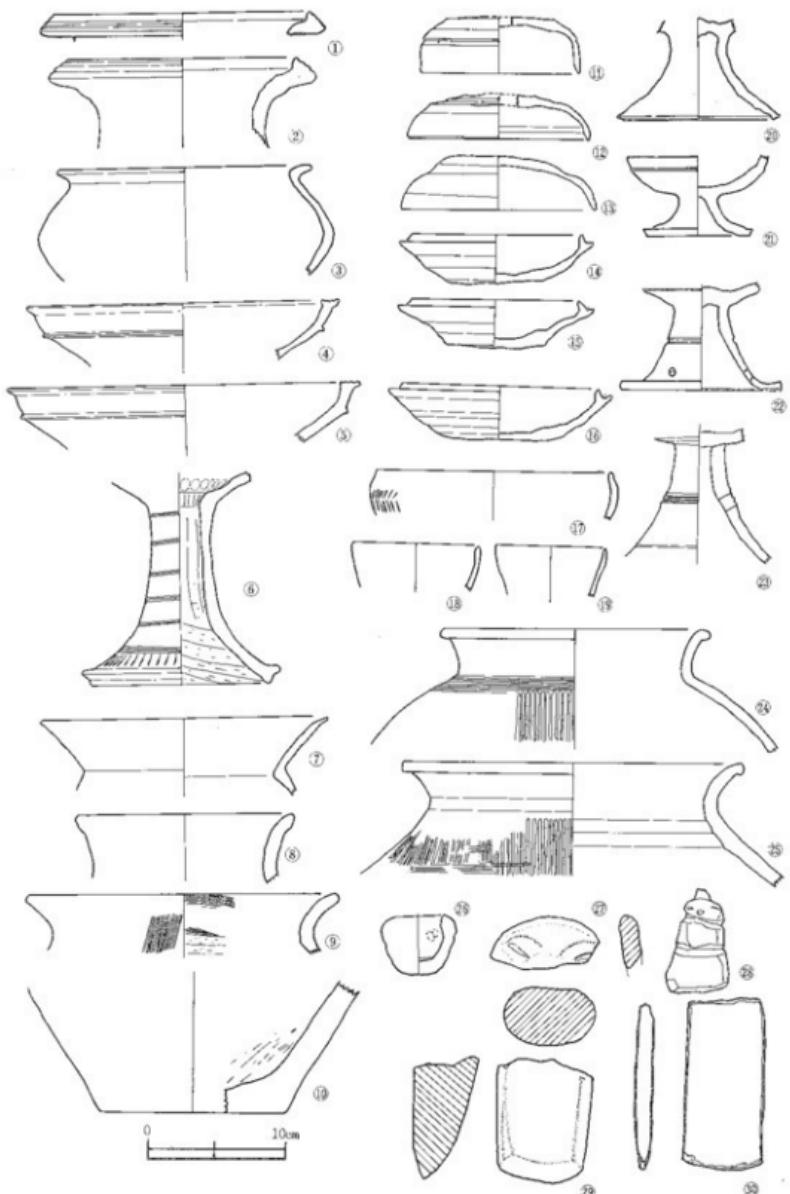
排水路はSPO02の北西部より北に向かって流れる。幅 1.8 m、深さ90cmのU字溝で、北側で再び大きく拡がる。

出土遺物は、黒色粘土層から弥生土器、須恵器、土鍋、一石五輪塔、石斧、石庖丁、人形型石製品、分銅型土製品、曲物底。つちの子などの木製品と多く、カラス貝も出土している。

そのため、弥生時代中期以後、取水場的に利用されていた谷間が中世に入り木組みと石組みでもってせき止められ、ため池として利用されたものと思われる。いずれにしても、井戸との組み合わせになる池は平城京、平安京等の宮殿遺構や官衙、寺院等のいわゆる貴族階級の遺構でしか認められていない。今日、このように一般庶民の居住した地域から、生活の痕のなまなましい施設が発見されたことにより、我が國の中世を研究していく上で貴重な資料を提示してくれた。（中村）



挿図72 SPO-02遺構図



插図73 SPO 02 遺物実測図

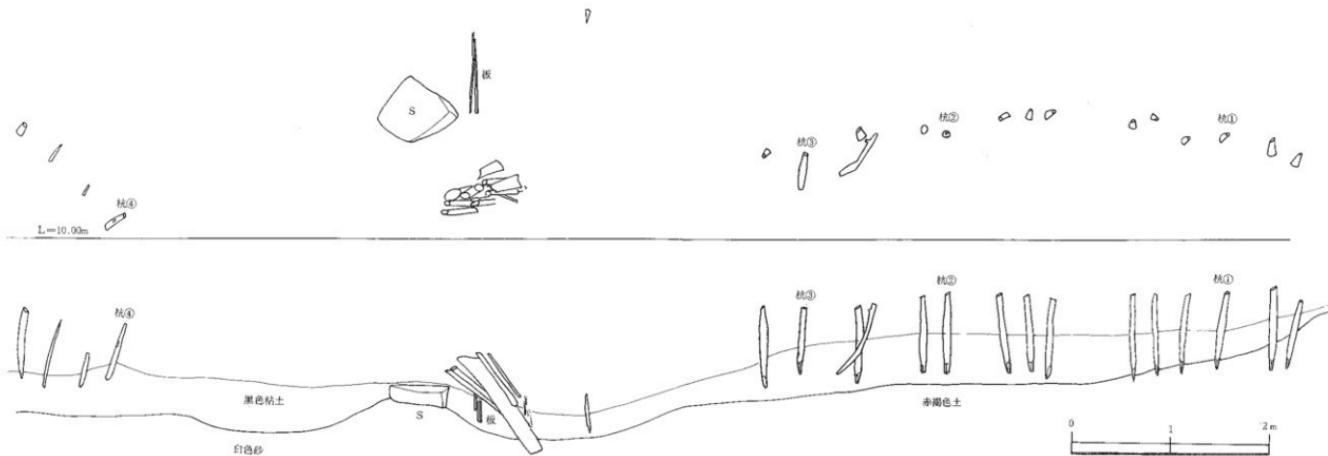


插图74 SPO 02遺構平・断面図

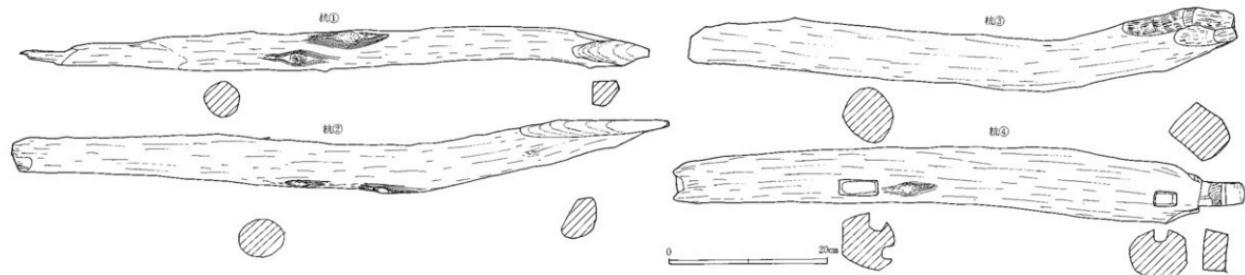


插图75 SPO 02 杭実測図

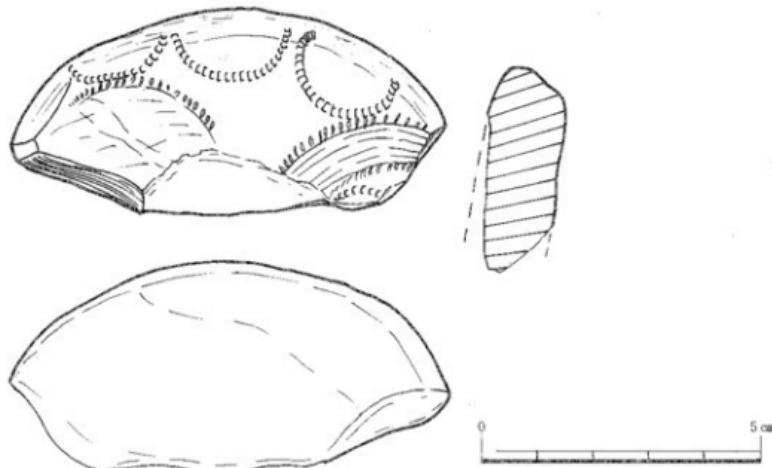
第3節 出土遺物

1 分銅形土製品（挿図76、図版33）

分銅形土製品は、弥生時代の祭祀の用具とみられ、集落関係の遺跡で出土する。山陰では米子市青木遺跡、倉吉市上米積遺跡の竪穴住居跡から出土した他、集落遺跡周辺からそのほとんどが出土している。布勢遺跡も排水路から出土したが、弥生時代中期の竪穴住居跡が近くに1棟あり、また同時期の丹塗高杯も排水路から出土しており、集落内の遺物であることには変わりはない。

分銅型土製品は、銅鐸のようにより大きな集団によって祭られたと考えられる青銅祭祀の性格と異なり、およそ数棟の住居が結合する小集団によって保有、使用された祭器と考えられる。そうした小集団は、祭祀の対象も家族集団の共同利害にかかわる範囲に限定できる。また、分銅形土製品が弥生時代中～後期の一定期間、中国・四国・近畿地方という限られた地域に分布した点、祭祀用具の性格がある程度確立していたとみられ、その祭祀が停止されると同時に祭具である分銅形土製品も作られなくなったものと思われる。その性格は、祭祀者が首から胸にかけたペンダント状の象徴であったとみられる。

山陰の分銅形土製品は、現在では遺跡数で14ヶ所、個体数で17個となった。布勢遺跡で出土したものは14N S E地区の排水路の黒色粘土層から出土し、上半部のみである。左右に刺突列点文が大きなカーブを描いており、眼の簡略形であろう。内に5条の櫛描平行線文がかかっているが、ほとんど磨滅しており肉眼では判断にくい。また「[]」状の施文具で小半弧を上側に3個描いているとみられる。現存長縦3.7cm、横7.7cmで厚み1.4cm



挿図76 分銅形土製品実測図

である。色調は黒灰色で、1mm程度の細砂を若干含み緻密な胎土で焼成も良い。ただ前述のとおり流れしており表面は磨滅がはげしい。形態的には古い方に属するとみられる。

分銅形土製品が山陰一山陽間の継のルートによる文化交流の現象の結果、山陰にもたらされたものとみると、ルートによりその利用度がある程度推定できる。水系別では天神川水系で3個、日野川水系で3個、大山から流れる妻木川水系で7個、阿弥陀川水系で1個、島根県側では吉田川水系で1個、斐伊川水系で1個、鳥取県東部の千代川水系では船岡町丸山遺跡について2例目である。県内各地で弥生時代中期の遺跡が多く認められるが、千代川水系ではあまり多くは発見されていない。が、布勢遺跡で弥生時代中期の遺構近くから分銅形土製品が出土したことは、数少ないながらも因幡地方の弥生時代中期の遺跡にも吉備地方の影響が色濃く入っていることが理解できる。と同時に、妻木・阿弥陀・日野・吉田川を含む西伯耆地方（出雲東端を含む）が全体の7割に達し、他の地方を凌駕している点、陰陽ルートのうちで日野川-高梁川ルートが最もよく利用されたと思われる。

今後、湖山池南岸から里仁、古海地区の丘陵部、また八坂、久末、桂木、津ノ井地区などの千代川右岸の丘陵地帯の調査が進めば、弥生時代中～後期の遺構が検出され分銅形土製品の出土例も増加するものとみられるであろう。（大谷）

2 石器・石製品（挿図77～79、図版32）

a はじめに

布勢第2遺跡の石器、石製品は主にSPO02あるいはその付近より集中して出土している。出土量のもっとも多い石斧（14点）を中心に10器種39点の石器が出土している。第1遺跡（縄文）に比べると出土点数は少ないが、第1遺跡にない砥石、石庖丁がみられ、遺跡の性格の違いを示すものとして注目される。

これらに用いられた石材は、第1遺跡と同じく鳥取大学教育学部地学教室教授赤木三郎氏、同講師岡田昭明氏に鑑定していただきました。重ねて感謝の意を表します。

b 石庖丁（挿図77-①、図版32）

完形品は全く出土しておらず、破片品が1点のみ検出された。紐穴部分からこわれている。体部の研磨は長軸方向の後、斜方向に施して仕上げている。その結果として斜方向への研磨痕が著しく、条痕が残るもののが少なくない。刃部は、両刃状をなし両面より研ぎ出されている。穿孔の方法は、穿孔具の回転によって研磨後に体部両面から穿孔されている。紐穴部分を見ると細かな階段状の段がついている。これは、穿孔過程における穿孔具の交換を想像する。紐穴の大きさは推計すると、径1.4cm位と思われる。すぐ近くに、紐穴が以前あけられ使用されていた痕跡がみられる。何かの拍子にこわれた為その部分を再加工し、また他の場所に穿孔し再加工された石庖丁と見受けられる。使用痕が最も著しく認められるのは、刃の部分である。その多くは磨滅と、細かなはくり痕として観察でき、全体的に刃こぼれが大きい。石材は、石英安山岩が使われている。

c 打製石斧（挿図77-②・図版32）

3点出土している。石斧にそえ木がかけられるよう頭部近くに加工が施され、くびれが作ってあるもので、第1遺跡出土のものと形態が異っている。全体的に刃こぼれがはげしく、磨滅のためか刃先が丸くなっているものが多い。石材は、安山岩が主流を占めている。

d 磨製石斧（挿図77-③～⑥・図版32）

全部で11点出土している。完形品は11点のうち2点のみで、他は胴部、刃部の破片品である。第1遺跡と同じく両面から磨き上げられた両刃の石斧で、ふくらみを持つ始刃石斧のものが多い。刃部を見ると全体的に割とするどい刃がつけられており、刃こぼれが大きいもの（③・④）がある。斜方向に研磨されたものが多い。石材は、板状安山岩古生代砂岩等が用いられている。

e 石 鏃（挿図79-①②・図版32）

2点出土している。ほぼ二等辺三角形をした①と、細長くスマートで舌部が破損しているものの②の2種類形態の違うものがある。①は長さ2.6cm巾2.0cm厚さ0.6cm、②は長さ3.5cm巾（胴部）1.2cm厚さ0.4cm舌部の巾0.6cmを測る。②にはベンガラしきものが塗ってある。石材は、2点とも無紋晶質安山岩である。

f 石 鍤（挿図79-③・図版32）

1点出土している。形は長靴の形に似ている。靴底にあたる部分の長さ2.8cm高さ2.6cm厚さ0.5cmを測る。刃部の加工は細かいはくり痕が並列し、両面から仕上げられている。全体的にていねいな仕上げである。石材は、無紋晶質安山岩が使われている。

g 砧 石（挿図78-①②・図版32）

11点出土しているが、石英安山岩質凝灰岩を素材としたものが圧倒的に多く、その他には流紋岩質凝灰岩のものがある。砥石の多くは破損したものが多く、完形をとどめるものは1点にすぎない。現存で観察する限り、長さは12～17cm前後のものが多く、23cmほどの大型のものが1点ある。形的には扁平のもの①が2点柱状のもの②が9点がある。使用面数については、3～5面の複数面を使用している。使用面数の差に砥石の石質、形、大きさなどの相異はない。使用痕で最も多く見られるのが磨減痕で、表面がなめらかな状態を全ての砥石に観察できる。擦り減って凹みが著しいものに②があり、平面がそり返えるほど使用されている。

h 敲 石（挿図78-③・図版32）

完形品のみ1点出土している。敲打痕としてのくぼみが顕著にみとめられる。最大径8.5cm、最小径4.0cm、重さ80gと、手ごろで持ちやすいものである。石材は、輝石安山岩が使われている。

i すり石 (挿図78-④・図版32)

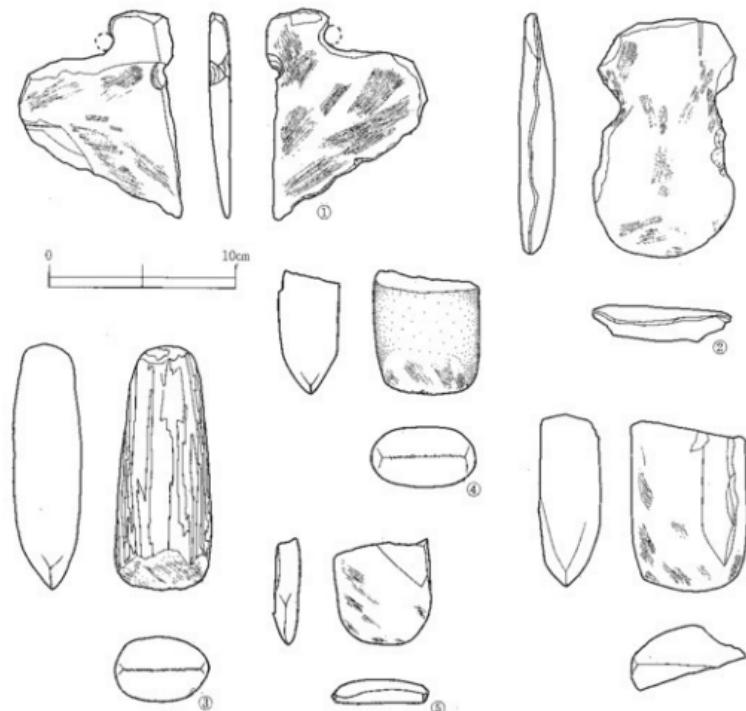
3点出土している。最大径12~14cm、最小径9~10cmと手ごろなものである。両面使われており、つるつるにすり磨かれている。石材は石英安山岩である。

j 石皿 (挿図78-⑤・図版32)

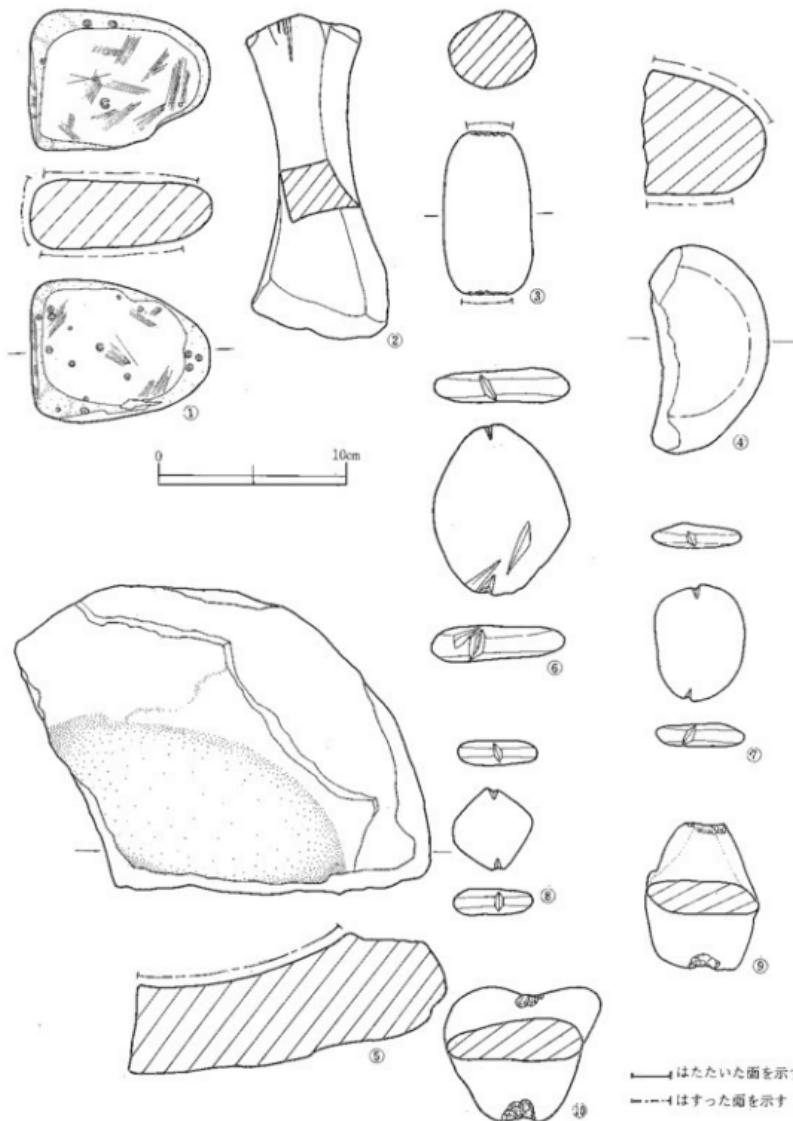
破片で1点のみ出土している。%が欠損している。完形ならば、直径30cm前後と考えられる。辺縁部と皿状部分との差は1.8cmを測る。第1遺跡に見られたようなアクリ状の痕跡は見られない。石材は、安山岩熔岩である。

k 石錘 (挿図78-⑥~@・図版32)

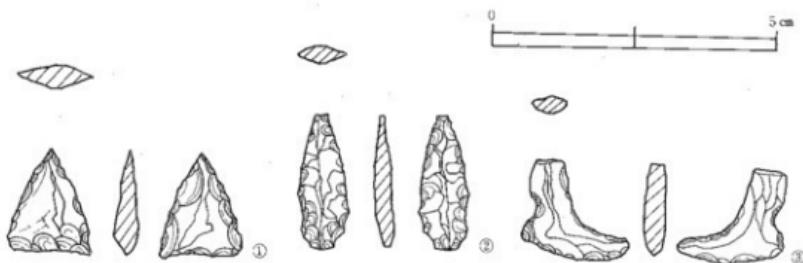
完形品ばかり5点SPO02から出土している。5点のうち、切り込みを入れた切目石錘が3点⑥⑦⑧。打ち欠きによるものが2点⑨⑩見られる。重さは30~70gと大きなばらつきはない。石材は、安山岩が主である。(津川)



挿図77 石庖丁、打製石斧、磨製石斧実測図



插図78 破石、敲石、すり石、石皿、石錐実測図

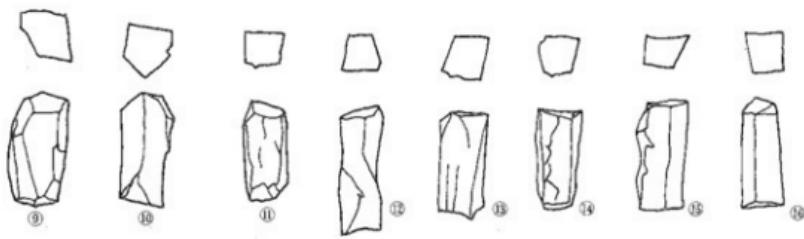
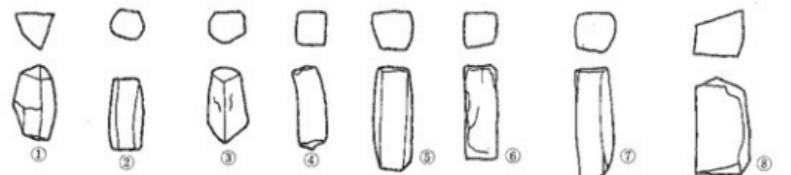


挿図79 石鎌、石匙実測図

3 玉作工房と玉製品（挿図80～83、図版33）

第2遺跡東側の斜面南部に位置するS102（遺物から弥生後期初頭と考えられる）から、緑色凝灰岩系の管玉未製品、原石を検出した。とりわけP7内で集中的に検出され、有溝の玉砥石が一緒に検出された。他に東側斜面全域にわたり原石がみつかっており、SB01、02の周溝内では挿図81⑥の原石が出土している。14Q地区では玉砥石も単独で出土した。

未製品は全て緑色凝灰岩系の石で、柔らかく爪で傷がつけられるほどであり、また粒子もかなり荒い。四角柱状のものがほとんどであるが、中には三角柱状①、六角柱状②のものもある。挿図80①～⑦は床面上あるいは柱穴埋土中出土のものであるが、それらは研磨さ



S=31

挿図80 管玉未製品実測図

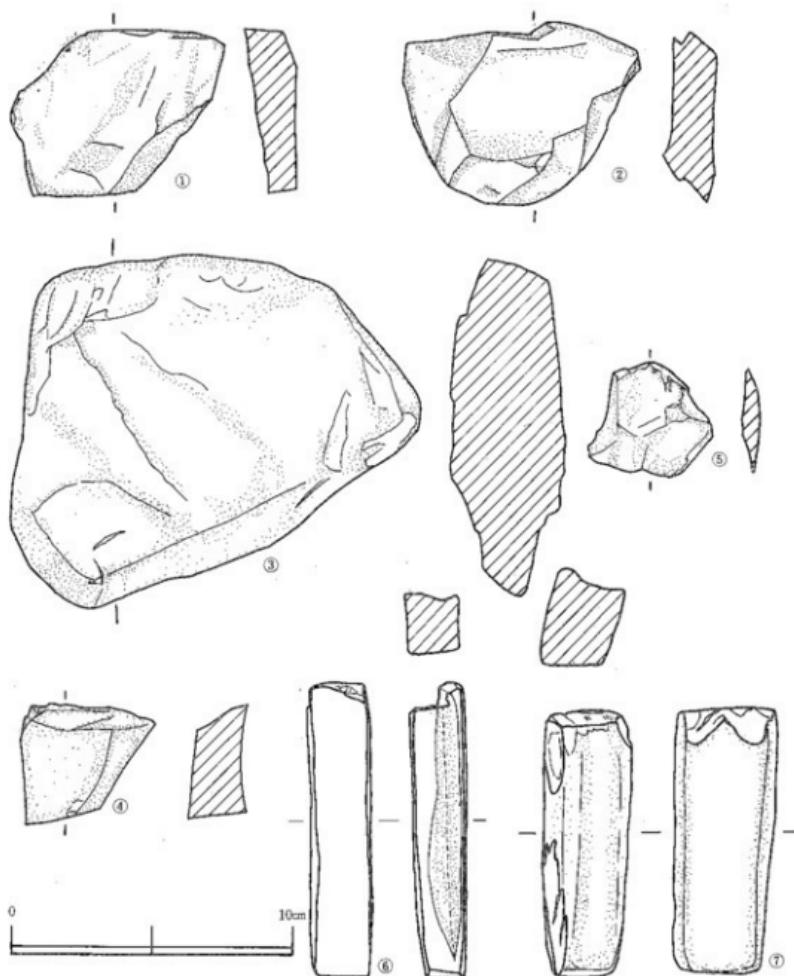


図81 原石、玉磁石実測図

れた痕跡がある。⑧～⑩は、P.7出土のもので、研磨の痕跡はない。形も不整形であることから、原石をそのまま打ちかいて四角柱状にしていたと思われる。P.7からは原石細片も多量に出土している。

玉磁石(図81-⑥)は長さ10.5cm、幅1.9cm、高さ2.1cmの四角柱状であり、端の一部を欠いている。6面とも研磨されており、溝の部分だけではなく、他の面も使用されたと考えられる。石は非常に緻密であり、光沢さえある。⑦は14P地区で単独で出土。四角柱状であるが、台形に近い断面をしている。長さ9.4cm、上面はややへこみ、有溝の玉磁石

である。緻密で棒状の玉砥石が2本出土しているのに対し、砂岩質の荒い玉砥石が出土していないことは注目される。同じく緑色凝灰岩を原石とする鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡でも砂岩質の玉砥石が出土していないことから、原石によって砥石の使い方が違うことが考えられよう。

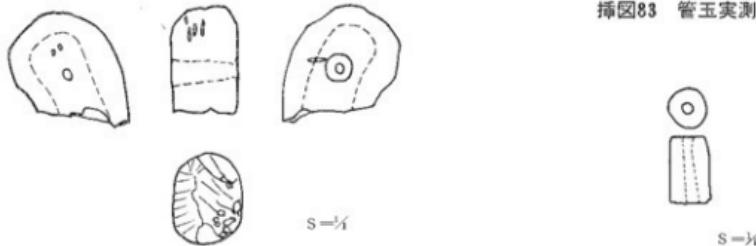
また、本遺跡では穿孔した未製品、製品が1点もみつかっていないことも注目される。S I 02付近は北、東、南がすでに削られており、削られた場所に、同時代の住居が存在した可能性がある。とすれば、分業の存在も考えられるが確証はない。

近年の発掘により、山陰の玉作に関する資料が揃いつつあるが、玉作遺跡を時代順に並べると次のようになる。松江布田遺跡（弥生中期中葉）、大栄町西高江遺跡（弥生中期後葉）、布勢遺跡（弥生後期前葉）、松江平所遺跡（弥生後期後葉）、出雲玉作遺跡群（古墳中期～平安時代）。長瀬高浜遺跡は弥生時代前期の玉作工房の可能性が強い。

他に玉製品は勾玉1点、管玉1点が出上している。勾玉は16Q NW地区の暗茶褐色土層（古墳時代の層位）で検出され、材質は乳白色の蛋白石（オパール）、無数のヒビ状の亀裂があり、下半を欠いている。孔は片側からあけられ完通させている。遺構との関係は不明。

管玉は、14N SE地区で黒色粘土層（中世の層位）から出上。二次的に運ばれたものと考えられる。材質は滑石、これも一方を欠く。欠けたほうから穿孔し、最後に反対側からも穿孔し、貫通させている。（坂本）

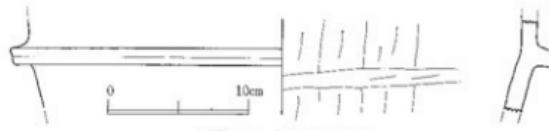
挿図83 管玉実測図



挿図82 勾玉実測図

4 墓 輪（挿図84、図版34）

推定内径34cm。下方に向かって少し口をすぼめる。遺存状況が悪く、外面の調整はわからないが内面は、タガの部分でヨコ方向のヘラ削り、その上下はタテ方向のヘラ削り。S P O 02より出土。（坂本）



挿図84 墓輪実測図

5 平安時代の土器（挿図85、図版34）

須恵質の皿であり、内面中央より外側と外面端部にかけて黒色になっており、他は青灰色。私都窯で焼かれたものと思われる。SPO01より出土。（坂本）



挿図85 平安時代の土器実測図

6 中世の土器（挿図86、図版34）

第2遺跡から出土した中世の土器にはa 中国産青磁、b 瓦質土器、c 須恵質の陶器、d 土師質土器がある。

a. 中国産青磁

①は口縁部のみ残る。色は緑青色。華南産か？

b. 瓦質土器

土鍋（②・③・④・⑤・⑥）と鉢（⑦と挿図69Po.1）がある。

土鍋は、全て池状構造から出土し、口縁の形態より3種類に分けられる。1) まっすぐに立ち立がった口縁の外部に羽をつけたもの②、2) 内湾する口縁に「V」字状の口縁をもつもの③、3) 口縁が「J」字形にふくらむもの④⑤⑥の3種である。1) 2) のタイプは内面横ナデ、3) のタイプには、横ナデとハケ目との2種類がある。いずれも外面には多量のススが付着しており、第2遺跡が中世においても、何らかの生活の場所であったことを推測させる。

⑦の片口鉢は口径推定22cm、高さ9.4cm。内面はハケ目。外面はナデ調整で指圧痕が観察できる。ススの付着はない。SPO02出土。もう一点、鉢がSE01より出土しており（挿図69Po.1）スリバチとも思えるが、やきが悪くもろい。

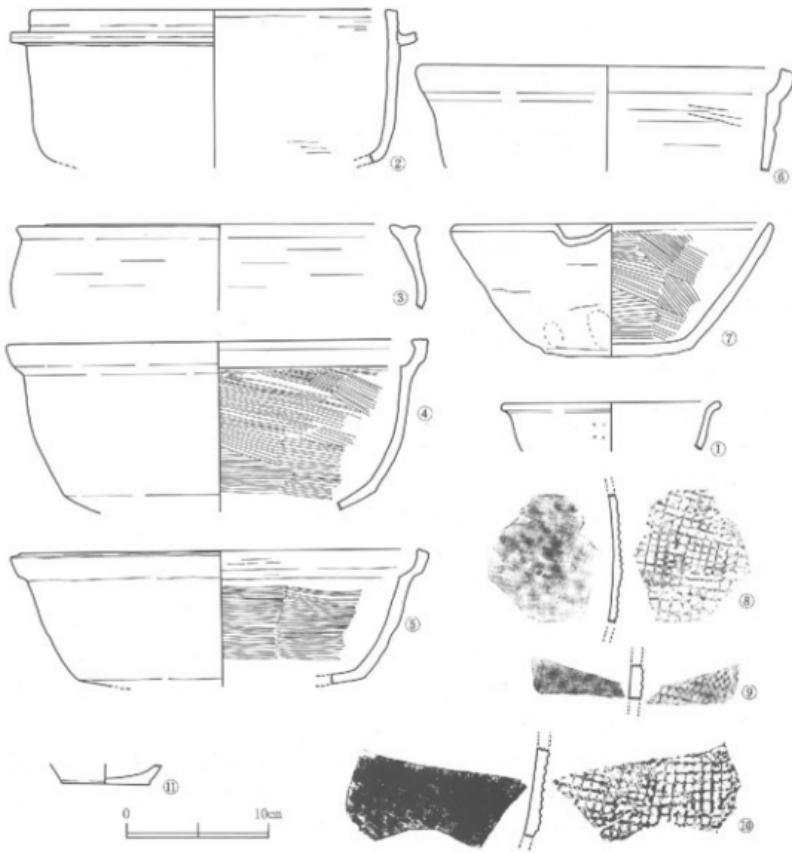
c. 須恵質の陶器

外面に格子状のタタキ目をもつものが、3点出土している。

⑧は、厚さ7～9mm。格子タタキがよく残り、内面は板状工具の木口で調整したと思われる、細かいハケ目状調整痕が観察される。⑨は⑧に酷似しているが、厚さ4～7mmで⑧より薄い。⑩は厚さ8～9mm。調整は⑦と同様。他に⑧の口縁と思われるものも出土している、内外面の特徴より勝間田焼ではないかと思われる。

d. 土師質土器

皿が1点出土している⑪。遺存状況が悪くわかりにくいが、底部糸切りか？ SPO02出土。（坂本）



插図86 中世土器実測図

7 一石五輪塔（挿図 87、図版 34）

一石五輪塔は、150 NW地区を重機によって掘下中検出された。風空輪を欠いているが、火輪までの高さは37cm、たて14.2cm、よこ15.2cmを測る。やや菱形になった四角柱状の石を削っているが、削りは少なく、水輪の丸みは少ない。

布勢遺跡の北約1kmには、因幡山名氏の居城である天神山城跡があり、その南の卯山には寺町が作られていたことがわかっており、この一石五輪塔も、天神山城が存在していた頃のものではないかと思われる。（坂本）

8 人形型石製品（挿図 88、図版 34）

高さ7.3cm、幅4.4cm、厚さ3.0cm（いずれも最大長）を測る。全体を3条の溝で4段に分け、上より2段目前面には目と口と思われる彫りがある。形態から考えると五輪塔の影響も考えられるが、人面を彫った石製品は島根県十王免横穴群第4号横穴でも出土しており、時期はにわかに定めがたい。しかし、何らかの信仰に関わりをもつものであったと考えられよう。（坂本）



挿図87 一石五輪塔実測図

挿図88 人形型石製品実測図

9 木 製 品（挿図 89、図版 35）

布勢第2遺跡では、漆器をはじめ多数の木製品、柱根、杭等が出土している。これらは全て14N S E、14N S W、14O S Eの3地区で出土したものである。共伴する他の遺物からみて、第2遺跡の木製品は室町時代に比定できる。

脚（挿図 89-①、図版 35-1）

盤などと組み合されるべき脚である。高さ11cm、巾15cm、厚さ2.4cmを測る。地面と接する部分には2mm大の小石がくい込んでいるのがみられる。

漆器 椅（挿図 89-②、図版 35-2）

口径14cm、器高5.8cmを測る。器壁は垂直に立ち上り口縁部はやや内湾する。内外面に黒漆を塗り底部外面および高台には塗らない。内面にはロクロ挽きの痕跡が残っている。外面の一部には朱漆を塗り、笹の葉状の文様を施し、底部内面にも朱漆の痕跡がみられる。

曲 物 底（挿図 89-③・④、図版 35-3・4）

3は、径13.2cm、厚さ6mmを測る。4は、径13cm、厚さ0.9cmを測る。材質はいずれもスギのようである。

つちの子（挿図 89-⑤、図版 35-5）

全長12cm、径5.4cm、中央括れ部分の径3.7cmを測る。

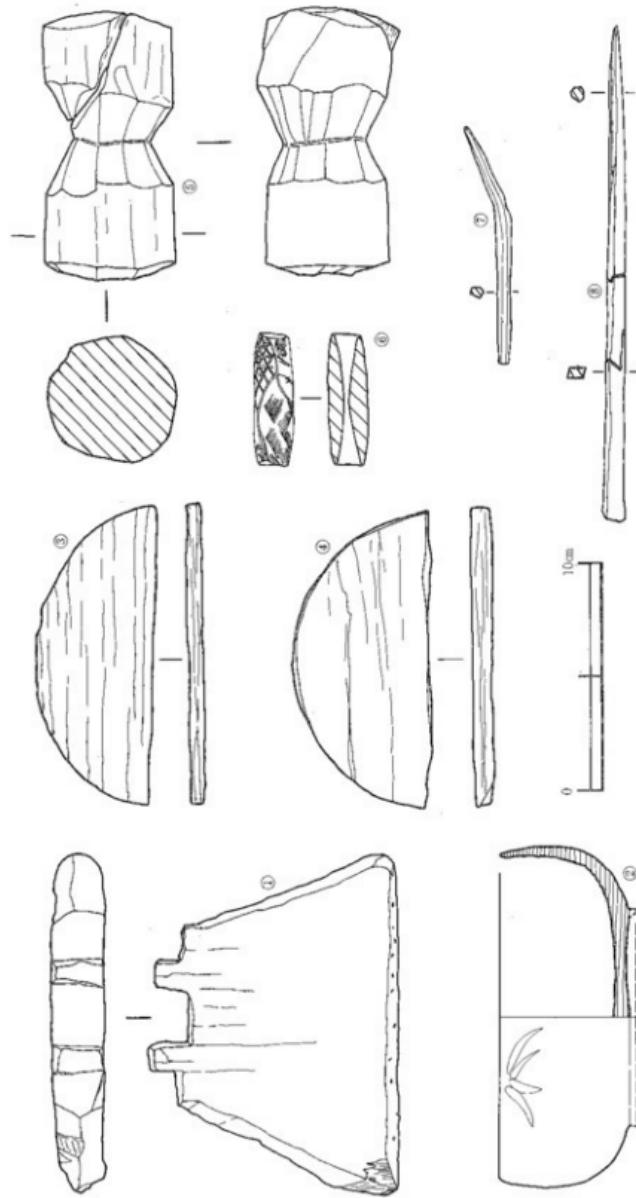
管状木製品（挿図 89-⑥）

全長5.8cm、端部径1.2cm、中央部径1.7cmを測る。外面全体に、線で区画し格子目、芭蕉などの文様を施しており、筒状を呈するが用途は不明。

箸（挿図 89-⑦・⑧）

⑦は全長10.5cm、径0.6cmを測り面取りをした箸と思われる。⑧は、第1遺跡12C NW Iの中世包含層より出土したものであり、全長21.9cm、厚さ0.7～0.8cmを測り完形である。（中野）

插圖 89 第 2 遺跡出土木製品實測圖



第4節 まとめ

陸上競技場の南側に位置する小丘陵部は、陸上競技場建設および土砂採取のために大きくその地形をかえた。以前の地は、20~30m級の小丘陵が細長く北に伸びる谷合で、段々畑として利用され、眼下は第1遺跡同様の低湿地であった。

まず最初に人々の生活の痕跡がみられるのは縄文時代からで若干の上器片および、すり石・石皿・石錘等の石製品が出土している。しかしながら、工事による破壊から残されたわずかな丘陵部には彼らの生活跡は検出されなかった。

人々の生活跡が残っていたのは、弥生時代中期末からで、丘陵の西斜面に円形の竪穴住居址SI01が1棟検出された。しかしながら、他の遺構は検出されなかった。

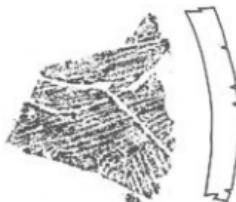
弥生時代後期になると遺構の数が増え、玉作り工房跡のSI02と掘立て柱建物SB01、02、03、04が検出された。掘立て柱建物の多くは、梁間3間、桁行4間で棟持柱を持つことを特徴としている。

弥生時代の遺構は全て丘陵の西斜面に位置し、谷間の東側でのみ検出された。当時、谷間はゴミ捨て場として利用されていたらしく土器、石製品、土製品等が出ている。

古墳時代後期となると生活の場は谷間を中心として西斜面に移行し、竪穴住居址4棟が互いに重複して検出された。それに対し、東側では、竪穴住居址が1棟検出ただけである。中世に入ると人々は、谷間の地に村を構えた。土鍋などの中世陶器や曲物などの木製品および五輪塔などが出土しており、人々の生活が続いていることを思いうかべることができる。ふり返ってみると、原始より人々は谷間の水を利用し得る小高い場所に居を構え、はじめは自然をそのままに利用していたが、低湿地を水田に開拓し、谷間を自分達に適したように作り変え、多目的に利用するようになっている。しかし、問題がないわけではない。古墳時代後期の竪穴住居跡が複雑に重複していることが何を物語るのか。また、ため池において、手づくね土器、分銅型土製品、人形型石製品等、日常の生活用具ではないものが出土しており、水に関連した祭祀的要素がうかがわれる。

しかし、この水に関すると思われる祭祀的要素は単に布勢第2遺跡で検出された池状遺構のみならず、湖山池を中心とした塞ノ谷、高住、

青島遺跡などの祭祀的要素をもつ遺跡との関連、また、千代川右岸にあって、土製船など水にかかる祭祀的要素を色濃くもつ秋里遺跡との関連をも合わせて考える必要がある。しかしながら、こうした祭祀的要素をもつ一連の遺跡群は、未だ不明な点が多く、今後の研究課題として努力してゆきたい。（中村）



挿図90 第2遺跡出土土器拓本